



植栽空間での景観の視認構造の把握

Study on Eye Movement Structure Looking Planting Scenery in Urban Area

要約 都市内での植栽デザインを考えるため、人間が植栽空間を把握する構造を視認行為を中心に調査・検討した。結果、植栽空間に対する視認構造は、植栽空間の緑量や色彩・配置に左右される可能性が示唆された。特に色彩については多くの色彩が存在することにより視線をその部分に誘導し、留める効果があると推測された。

研究者 山本 聡
YAMAMOTO Satoshi

■はじめに

本研究では、植栽空間において対象となる景観を把握する際の視認行為を中心に、人間がその景観を把握する構造を明らかにし、今後の都市内での植栽デザインに寄与することを目的とした。

■研究の方法

1) 研究対象地

調査対象は、人間活動の及ぶ地域を基本とし、都市内の植栽地として神戸市、大阪市など都市中心部の植栽空間である都市公園周辺および街路緑化された道路、商業施設の人工地盤上に緑化された空間とした。

2) 調査方法

景観評価では、研究対象地の植栽空間および周辺市街地の景観写真を用いた評価実験を行った。実験に際しては、緑量、色彩、形態を考慮し、各要素を変化させたそれぞれ一対の景観写真を用いて比較した。データの取得には、視線解析装置（ナック製EMR-8）を用い視線の動向および視線の停留状況、凝視に関わる瞬目の状況について捉えた。各景観を20秒以上表示し、自由に見るという方法でデータを収集し、解析では各景観視認初期の10秒間のデータを用いた。

■結果と考察

1) 緑量の異なる植栽空間に対する視認特性

都市内の業務景観において、前面に植栽があり緑視量が多い場合と冬期に落葉し、緑視量が少なく背

面の業務ビルが完全に見える場合の比較を行った結果、緑視量が多い場合は視線の動きが植栽部分に沿って動く傾向が、緑視量が少ない場合は視線が急激な動きをするか前面部の落葉した樹木の幹などに引き寄せられる傾向が見られた。

2) 色彩の異なる植栽空間に対する視認特性

色彩の異なる植栽空間では、色彩が鮮やかでアクセントとなる花が存在する景観に対しては視線の停留が比較的多く見られるのに対して、植栽直後の様な花がまだ開花しておらず緑色の葉のみが存在する景観に対しては視線の停留も少なく、停留しても時間的に短い傾向が見られた。すなわち、多くの色彩が存在することにより視線をその部分に誘導し、留める効果があると推測された。

3) 形態の異なる植栽空間に対する視認特性

植栽形態の相違として、高木植栽の前面に別の植物が見られる景観を比較対象として評価実験を行った。その結果、5名の被験者全員が高木植栽に対し注視する結果となった。前面に別の植栽が存在する景観では5名中3名が前面の植栽にも視線の停留が見られ、植物による視線の誘導効果が現れたものと考えられた。

■まとめ

以上の様に、植栽空間に対する視認構造はその緑量や色彩・配置に左右される可能性が示唆され、今後のさらなる検討により都市内での植栽デザインが向上するものと考えられる。

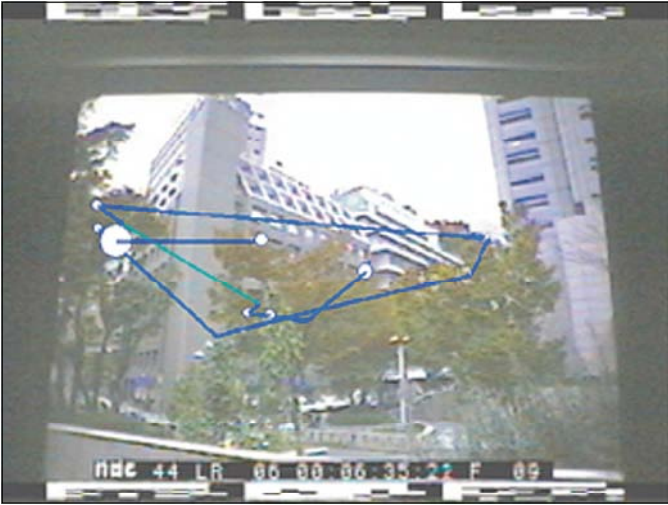


写真-1 緑視量が多い場合の視線の停留例



写真-2 緑視量が少ない場合の視線の停留例

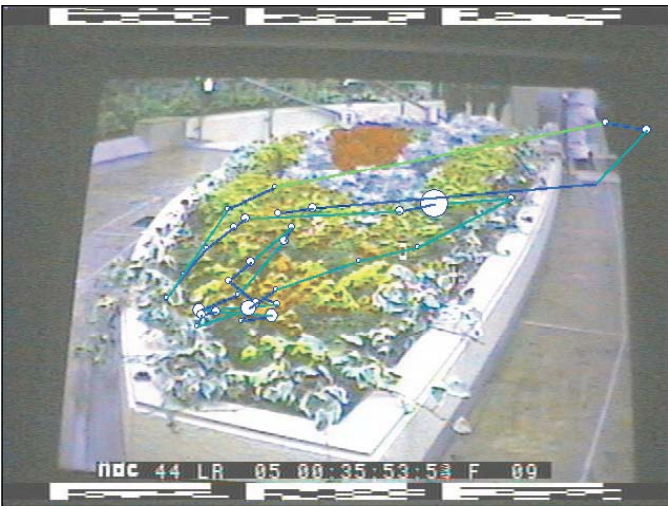


写真-3 色彩の鮮やかな花壇の視線の停留例



写真-4 色彩変化の乏しい花壇の視線の停留例



写真-5 前面の植栽への視線の移動